

VAC

—自己点検、自己評価とVAC

加藤 薫

はじめに

日本の高等教育は、一九九〇年代の青年人口減少という人口動態に直面し、それまで適齢人口に依存していた大学などはこの変化の影響をまぬがれないことがはっきりしてきた。この事態は天災ではなく経営上もあらかじめ予測のついでであり、適切な対処の方法はいくつか考えられる。わかっていることは、これがどんなに厳しい環境であるにせよ、その大学が社会のニーズと大学を必要とする学生の要望に十分答えることができ、支援を得られる限りは衰退を防ぐばかりでなく逆に発展も可能であるということだ。

戦後の高度経済成長時代にその時代の風潮に便乗していわゆるマス・プロ教育を正当化してきた大学教育は、

大胆な予測をさせていただければ二一世紀にはもはや過去のものでしかなくなるであろう。その転換を促す要素としては、この就学適齢人口減少の結果として、学生が大学を選択する学生上位の買手市場に移行するときに始まると予想できる。学生は大学に対して、個人個人の能力を高めてくれたり楽しい時が過ぎせるかというようかなり明確な付加価値の充実を求めている。それはまた学生労働力をもとめる産業社会の雇用構造そのものの変化をかなり反映しているはずだ。

いずれにしても、大学は従来の研究、教育、運営機能に根本的な改革を必要とする。使い古された提案だが、研究面では施設、設備、環境、予算の充実と自由度の増大、教育面ではカリキュラムの刷新、学生の生活学習上

の満足度の向上、付加価値のある教授法の開発、運営面ではより効率的かつ合理的でしかも国際化の波にも対応できるほどの多様性を許容するヒューマンな事務処理システムと運用といったものが要求されている。¹⁾

VACとは

VAC (Value Added Campus) は神奈川大学経営学部創立時より構想された理念を集約した造語であり、それは大学の今日ある姿を単に維持してゆくだけではなく、明日は何かひとつ新しい価値が付加されているように学生も教職員も考え、実践してゆく永久運動を支えるコンセプトであり、現在においては、大学サイバールの戦略として、あるいはその戦略を構想し、実現することにある。重要なことはここで現在ある学部の姿も神奈川大学の姿も理想が実現された完璧なものとしては考えないことだ。したがってValue addedなキャンパスとはあくまで私たちの理想であり、この理想が実現したと言える日まで、私たちは日々の実践において何かValue addingな要素を発見し、現在の状況にひとつでも新しい価値あるものを付加してゆくことである。そういった理想の環境作りに向かって行く過程で大きな課題として考えるのは、結果として人口動態や大学財政、立地環境といった外的要素に左右されるにせよ、従来こう

いった議論ではえてして抽象論に終わりがちなより大学経営のソフトウェア的な部分、すなわち社会的貢献度、世間の評判、学生にとっての魅力や満足度、教育内容、社会の変化への対応力、教職員の研究教育運営にたいするモラル、施設設備備品、卒業生の支援、等等といった簡単に計量化できないが大学の生命を支えている要因を考察し、それらを具体的に充実してゆくことによってキャンパスを活性化し、より魅力的なものに改善してゆくことである。²⁾

「VAC」プロジェクトについて

VACプロジェクトはこういった意味で国際経営研究所の活動の中でも極めてユニークな性格を備えている。それは単にいわゆるアカデミックな研究のための研究だけではなく、神奈川大学平塚キャンパスをより付加価値のある、情報の発信基地として、また地域・社会に開かれた、そして社会からの要請と批判に耐え得る環境作りと、常に教員、職員、学生といった構成員のアクティブなはたらきかけとレスポンスを可能にするための提言と実践、そしてそのフィードバックまでを視野にいれての、いわば経営学部サイバールの戦略を考えるプロジェクトであるという意味からである。

学生に対しては、大学というものを社会人になるため

のひとつの通過点と認識し〈手段〉合理主義の上に立つて大学生活を正当化するのではなく、最低4年間という学生生活そのものが価値を持つ〈目的〉合理主義的発想を共有し、その結果当然発生してくるキャンパス・ライフをより充実したものにするためのアメニティー空間の創造的活動に自ら積極的に参加することが求められる。VACプロジェクトはまずそういった積極的な学生からの働きかけがあった場合にやはり何らかの積極的な対応をもたなければならぬが、それらをもっとも有効な形で受発信する機構、および機能について検証する。

このためまず経営学部において「VAC委員会」を設け、さらには理学部にも同様の「VAC委員会」を設置していただいた。平成五年度には「学生VAC委員会」が発足し、学生意識のリサーチ、食堂問題、問題解決への方法論、期待する大学像などの検討を始めていく。また初の経営学部卒業生に対する四年間の学生生活に関する包括的なアンケート調査を実施した。これについては毎年実施してゆくものであり、いずれ報告書の形でまとめる予定である。講義やカリキュラム、キャンパス環境に対する学生のフィードバックはVAC構想から言えば重要なファクターであり、これを大学管理者が矮小化して使うような管理強化のための自己点検、自己評価とは一線を画しつつ、学生の意見をできるだけ良い形

で反映できるメカニズムの構築を図る。出版物としては新聞サイズの「VAC」を毎年発行してきているが、この記事の取材、編集、発行は教職員と学生の協力のもとにおこなわれており、これもキャンパス内でのコミュニケーションの活性化の試みであり、キャンパス内外での評価は高いが、さらに充実の方向での検討を重ねている。

キャンパスという空間をより魅力的なものにするための研究プロジェクトの一環としてすでに社会に存在するアメニティー空間創造プロジェクトは大いに参考となる。このためVACプロジェクトでは掘禎一郎氏の協力を得て「東京デイズニールランド」設立に関連する資料を大量一括入手した。現在その保管方法の検討、整理登録の段階だが、いずれ研究、教育資料として公開する予定である。またこれもVACプロジェクトのフィジブル・スタディとしてキャンパスへのパブリック・アート導入を検討し、実施した。一九九三年一月には大学祭行事の一環として、学生の協力のもと、高さ七メートルの木造立体を一点制作した。これも順次増設してゆく計画である。

地域との交流、また情報の発信基地というキャンパスの意味づけから地元メディアとの交流は不可欠である。経営学部発足時より学部教育カリキュラムとして湘南

ケーブル・ネットワークとのジョイントで番組制作、放映を実施してきている。現在「市民チャンネル」において毎週五日（再放映含む）三〇分番組を通じてさまざまなキャンパス関連ニュースを放映しており、教職員学生一体の製作体制を築いている。また神奈川県と提携校であるカンザス大学の所在するローレンス市は平塚市と姉妹都市関係にあり、両市在のCATV相互での自主制作番組交換が行われているが、事務交渉から翻訳の問題まで当初より平塚キャンパス教員スタッフが関与し、現在では平塚市イングリッシュ・スピーキング・ソサエティをも巻き込んだ市民と共生する国際交流番組として充実してきている。その他、毎年一月の大学祭開催時期にキャンパスで行われる市民ゲート・ボール大会も格好の学生・教職員・市民の交流の場としてすっかり定着した感がある。また先頃Jリーグ入りを果たしたベルマーレ平塚の子供サッカー教室もグラウンドで開催されたりしているが、しかしキャンパスは市民の有効利用の場としてはまだまだ不十分で未整理の課題も多く、これからさらに検討を重ねたい。

VACプロジェクト発足以来がけてきているのがCI（キャンパス・アイデンティティ）の構築である。ここでCIについて論ずる余裕はないが、一口で言えばコーポレート・アイデンティティ、あるいはユニバー

シティ・アイデンティティといったコンセプトに準ずるものと考えている。その方法やアプローチは様々あるが、最初にてがけたのはキャンパス・グッズの開発であり、デザイン数から言えば現在までにトレーナー二種（計四色）、スイングトップ二種（計四色）、Tシャツ四種（計六色）、封筒（五サイズ六種）、レター・パッド（二種）を開発した。今後も地道に商品開発への提言を行っていく一方、CIの概念をより広範囲なキャンパス活動に適用してゆく時期にあると言えよう。

（注）

（かとう・かおる／経営学部教授）

1. 十八歳人口減少と大学淘汰の関連については既に多数の記事や論文が発表されている。本稿をまとめるにあたっては、喜多村和之編「学校淘汰の研究」（東新堂、一九八九）の結論―学校淘汰の比較的考察、四節・三一―三二六頁を参照。

2. VAC概念は経営学部設立以前、一九八七年に既に提唱された。公の出版物としては「VACの構想」（学園ニュースかながわ、第26号 神奈川県、一九八九）が最初。本稿をまとめるにあたっては一九九一年神奈川県職員研修における筆者講演「VACについて」の草稿を参照。